北九州市立大学

文　学　部　紀　要

第 94 号

20 世紀転換期シカゴのハル・ハウス

寺　田　由　美

北九州市立大学文学部

比較文化学科

２０２４

20 世紀転換期シカゴのハル・ハウス

寺田　由美

はじめに

13 年前、在外研修でシカゴ郊外の大学町に滞在していた際に町の図書館で知り合った地元の人と雑談中、ふとした拍子にシカゴが生んだ著名人としてセツルメント活動家のジェーン・アダムズ（Jane Addams）の名前を挙げたところ、相手にポカンとされた経験がある。その男性がたまたまアダムズを知らなかっただけかもしれないが、1931 年にノーベル平和賞も受賞した地元の名士でありながら、もしかすると一般社会では忘れられた存在なのかもしれないと思った記憶がよみがえる。

2000 年に出版されたアレン・デーヴィス（Allen Davis）の『アメリカのヒロイン』（第 2 版。初版は 1973 年）や 2022 年にオックスフォード大学出版局から出版された『ジェーン・アダムズに関するハンドブック』（以下『ハンドブック』）を読むと、13 年前の筆者の印象もあながち的外れではないらしい。デーヴィスは著書の中で、関連資料を 82 巻のマイクロフィルムにまとめることになる「ジェーン・アダムズ文書プロジェクト」（1984 － 85 年）立ち上げまで、アダムズは一般社会で忘れられた存在であるばかりか、アカデミックな研究対象とされることも決して多くはなかったと述べている [1]。同様に『ハンドブック』によると、19 世紀末から 20 世紀初頭の社会理論を考えるうえで最も重要な存在のひとりでありながら、長らくアダムズの社会学、哲学、ソーシャルワークといった領域への貢献は、アカデミズムの世界で忘れられてきたという [2]。それが 21 世紀転換期になって、社会学、哲学、政治学、歴史学など多岐にわたる学問領域の研究者から、アダムズは知的なパイオニアとして注目を集めるようになった。オックスフォード出版局のサイトによると、『ハンドブック』は「今日のジェーン・アダムズ研究の成熟の証左」であり、「半世紀足らず前であれば、こうした学究的なコレクションは正当とは認められなかったであろう」とのことである [3]。

『ハンドブック』は、アダムズが、同時代人のマックス・ヴェーバー（Max Weber）やエミール・デュルケーム（Émile Durkheim）、ジョン・デューイ (John Dewey) のようなアカデミズムのステータスを欠き、さらにセツルメント活動から得た経験をもとに論文やスピーチを著してきたがゆえに、それらが理論的で学術的なものとして受け止められてこなかったこと、また第一次大戦後の革

---

[1] Allen F. Davis, *American Heroine: The Life and Legend of Jane Addams* (Chicago: Ivan R. Dee, 2000 [1973]), xvii-xix.

[2] Patricia M. Shields, Maurice Hamington, Joseph Soeters (ed.), *The Oxford Handbook of Jane Addams* (New York: Oxford University Press, 2023 [2022]), 3.

[3] Oxford Academic, “The Oxford Handbook of Jane Addams—Abstract”, accessed December 8, 2023, https://academic.oup.com/edited-volume/41988.

新主義的な風潮の衰え、第一次大戦を契機とした好戦的な愛国主義やナショナリズムの高まりがあったことがこれに関係していると指摘する[4]。1960 年代にアダムズの革新性を問う研究が立て続けに出版された後は再び忘れ去られ、女性史が興隆する 1980 年代を経て、21 世紀現在、社会学、哲学、民主主義、フェミニズム、ケアの倫理学、コミュニティ論、社会倫理、平和、行政学、そして社会正義論といった広範な分野へのアダムズの貢献が、がぜん注目を集めるようになった。38 章からなる『ハンドブック』では、社会学、哲学、行政学、福祉学（ソーシャルワーク）、フェミニズム、平和学、国際関係学といった学問領域に、あるいはその領域を横断して、アダムズの行動や思考がいかなる影響を及ぼしたのか、また彼女の活動が分断を深めつつある今日的状況を考えるうえでどのような意味を持ちうるのかについての考察が試みられている[5]。

ジェーン・アダムズについて、彼女の甥であるジェームズ・W・リン（James Weber Linn）が 1935 年に『ジェーン・アダムズの伝記』を出版して以降、約 30 年間、まとまった伝記や研究書は見当たらない[6]。1960 年代になってアダムズの革新性や急進性に注目した、クリストファー・ラッシュ（Christopher Lash）の『アメリカの新しい急進主義』、ダニエル・レヴァイン（Daniel Levine）の『ジェーン・アダムズとリベラルの伝統』、デーヴィスの『アメリカのヒロイン』などが出版された[7]。21 世紀に入るとジーン・エルシュテイン（Jean Elshtain）の『ジェーン・アダムズとアメリカ民主主義の夢』、ルイーズ・ナイト（Louise W. Knight）の『市民』など、アダムズの生涯を民主主義や社会正義の文脈の中に位置づけようとする研究が現れた[8]。また、『ハンドブック』が紹介しているように、21 世紀以降は、社会学、哲学、行政学、福祉学、フェミニズムなど様々な学問領域からも、アダムズは注目されている[9]。日本でアダムズを扱った研究としては、彼女を改革者としてどう評価するかではなく、彼女が社会福祉や政治改革を目指すに至る具体的な過程を重視した常松洋「改革者ジェーン・アダムズ」、アダムズの活動からセツルメント運動のより伝統的で保守的な役割を明らかにしつつ、女性史の文脈の中でセツルメント運動とアダムズの再評価を試みた肥後本芳男「ジェーン・アダムズとハル・ハウス」、同じく女性史の観点から大学教育を受けたアダムズを含む女性の活動を考察した緒方房子「大卒女性の第一世代」、ジェンダーの視点からアダムズの平和主義を解釈した高村宏子「第一次世界大戦とジェンダーに関する一考察」、大衆雑誌での言

---

[4] *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 4-5.

[5] *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 7-29.

[6] James Weber Linn, *Jane Addams: A Biography* (Melbourne: Swinburne Press, 2013 [1935]). Kindle.

[7] Christopher Lasch, *New Radicalism in America 1889-1963: The Intellectual as a Social Type* (New York: W. W. Norton & Company, 1997 [1965]); Daniel Levine, *Jane Addams and the Liberal Tradition* (Madison: State Historical Society of Wisconsin, 1971); Davis, *American Heroine*.

[8] Jean Bethke Elshtain, *Jane Addams and the Dream of American Democracy: A Life* (New York: Basic Books, 2002); Louise W. Knight, *Citizen: Jane Addams and the Struggle for Democracy* (Chicago: University of Chicago Press, 2005).

[9] *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 7-26.

説を通して中・上流階級に社会問題を提示し教育を施そうしたアダムズを描いた林瑞婉「革新主義時代の大衆雑誌における改革の言説と社会教育」、などがある[10]。また、ジョン・デューイやレフ・トルストイ（Lev N. Tolstoy）の思想とアダムズの活動を関連付けた研究や、福祉分野へのアダムズの貢献を説いた研究も数多い[11]。

さまざまな学問領域から、あるいは実践の現場から、現在に至るまで注目を集めるジェーン・アダムズとは何者であったのか、また彼女の思考や実践は今日の社会にどのような影響や意義を持っているのか。本稿では、上記先行研究に基づきながら、アダムズの生い立ちから彼女の思考形成の原点をたどり、次にその思考の実践の場としてのハル・ハウス開設と活動プログラム、アダムズを取り巻く人的ネットワークについて整理し、従来の慈善活動との違いについて考えてみたい。

1　ジェーン・アダムズの生い立ち

(1) シーダーヴィルでの日々

ジェーン・アダムズは、南北戦争勃発の前年にあたる 1860 年 9 月 6 日、イリノイ州シーダーヴィルで生まれた。その頃のシーダーヴィルは、ところどころに丘が散らばった平原が広がり、「田園的な美しさ」に溢れていた[12]。ハル・ハウスの活動で教育が重視されたことはよく知られているが、1860 年前後から各地で州立大学が開校し始めており、また南北戦争後にはヴァッサー、スミス、ウェルズリーといった名門女子大学が設立され、それまでのセミナリー（女子の私立専門学校）よりももっと専門的な教育の機会が女性に広がり始めた時期でもあった。アダムズは、多くの女性がはじめて大学に進学し、卒業後に専門職につき、投票権を獲得した世代に属している[13]。

父ジョン・ユイ・アダムズ（John Huy Addams）は、典型的な 19 世紀アメリカの「セルフメイド・マン」であった[14]。1822 年にペンシルヴェニア州に生まれ、経済成長著しい時代に青春を送ったジョンは、ビジネスでの成功を夢見るようになった。製粉業に従事するようになったジョンは、1844 年に上層中流階級出身で 5 歳年上のサラ・ウェーバー（Sarah Weber）と結婚する。ふたりは

---

[10] 常松洋「改革者ジェーン・アダムズ」『史林』61 巻 2 号、1978 年、66－99 頁。Yoshio Higomoto, “Jane Addams and Hull House: Immigrants, Women, and Peace in the Progressive Era,”『同社大学英語英文学研究』57－58 号、1992 年、138－158 頁。緒方房子「大卒女性の第一世代―ジェイン・アダムズとフローレンス・ケリー」『帝塚山論集』89 号、1998 年、13－39 頁。高村宏子「第一次世界大戦とジェンダーに関する一考察」『東洋女子短期大学紀要』31 号、1999 年、99－117 頁。林瑞婉「革新主義時代の大衆雑誌における改革の言説と社会教育」『同志社アメリカ研究』40 号、2004 年、45－64 頁。

[11] 米澤正雄「ジェーン・アダムズの思想形成とハル・ハウスにおけるセツルメント事業の展開―カーライル思想からトルストイ思想への転換を軸にして」『東洋大学文学部紀要　教育学科編』34 号、2008 年、171－218 頁。木原活信『J. アダムズの社会思想実践研究―ソーシャルワークの源流―』川島書店、1998 年。

[12] 大井浩二「アメリカの聖女たち―キャリー・ネイションとジェイン・アダムズ―」『同志社アメリカ研究』26 号、1990 年、37－38 頁。Jane Addams, *Twenty Years at Hull House* (Radford, VA: SMK Books, 2012 [1910]), 14-15; アダムズの甥であるリンによると、「イリノイ州のアルプス」と呼ばれていた（Linn, *Jane Addams*, chap. 1, Kindle.）。

[13] Davis, *American Heroine*, 3. 緒方「大卒女性の第一世代」、13 頁。イリノイ州立大学も 1857 年に開校している。

[14] Davis, *American Heroine*, 4; Knight, *Citizen*, 13. 常松「改革者ジェーン・アダムズ」、70 頁。

ともに比較的裕福なドイツ系の家庭で育ち、共通点も多かった。結婚直後、ビジネスチャンスを求めて、サラの父親を加えた3人でイリノイ州へと引っ越した。ウィスコンシン州との州境に位置するシーダーヴィルでジョンが営む製粉所は繁盛し、南北戦争中には金融業や不動産業にも進出して、地方の名士となった。一方サラは、常に人のために働くことを喜びとした、信仰心厚い女性で、地元の女性たちから信頼を集めた。彼女は1863年に出産が原因で亡くなるまでの約20年間に9人の子どもを出産したが、成長できたのは5人で、その末っ子がジェーンであった[15]。

ジョンは地域活動にも積極的で、シーダーヴィルへの鉄道誘致から教会、学校、図書館、墓地の建設まで、さまざまな面で地域に貢献した。また、共和党議員として1854年から16年間、州上院議員も務めた。南北戦争中にはイリノイ州連隊を支援し、リンカーンの友人でもあった。奴隷制度に反対し、地下鉄道の活動にも関与した一方、移民への投票権付与には懐疑的な姿勢を示したジョンは、この時代の「リベラル」な政治家の典型と言えよう。宗教に関しては、もともとはサラと同様にドイツ改革派教会に属していたが、むしろヒックス派クエーカーに共感し、ジェーンには「常に自分の内面に正直であれ」と説いた。この父から、ジェーンは強い影響を受けて育つ[16]。

大きな水車が回り、穀物を粉にしてゆく製粉所や、音を立てて木材を切断する製材所はジェーンにとっても格好の遊び場所であった。そんなジェーンの子ども時代に暗い影を落としたのは、相次ぐ家族の死であった。母亡き後に脊椎カリエスに罹患したこともあり、物静かで内省的になったジェーンを見守り、母親代わりを務めてくれたのは15歳年上の姉メアリと10歳年上のマーサのふたりであった。ところが、そのマーサが1867年にチフスで亡くなる。相次ぐ近親者の死は子どものジェーンに死へのトラウマを与えたとされる。ジェーンが8歳になったころ、ジョンは再婚した。ふたりの息子を連れてジョンと再婚したアンナ・ホールデマン（Anna Haldeman）は、知的で魅力的な未亡人であったが、継母としては厳格で規律にうるさく、ジェーンとはあまり相性がよくなかったようである。しかし、実兄（ウェーバー）とふたりの姉（メアリとアリス）、ふたりの義理の兄弟（ハリーとジョージ）とは、ジェーンがシーダーヴィルを離れてからも頻繁に手紙のやり取りをしており、きょうだいの絆は強かった[17]。

1877年9月、ジェーンは長姉メアリと同様、ロックフォード・セミナリーに進学するために、シーダーヴィルを離れることになる。

---

[15] Linn, *Jane Addams*, chap. 1, Kindle; Knight, *Citizen*, 14-24.

[16] Knight, *Citizen*, 24-32; Addams, *Twenty Years at Hull House*, 8-17, 18-21. 自叙伝のなかでアダムズは、「…父の並々ならぬ影響は絶大で、彼がかつて（私に与えた）影響全てを述べることは不可能であるほどなので、単純に私の最初の記憶はすべて父に関する記憶に結びついているように思われる。さらにその結びつきは、私の至高の愛情をしっかりと保ち、人生の道徳的関心へと私を誘い、のちに複雑な人生の迷路に切なくも陥った私に、道しるべとなる糸を与えてくれた」と述べている（Addams, *Twenty Years at Hull House*, 8. 木原活信『シリーズ福祉に生きる16　ジェーン・アダムズ』、大空社、1998年、13頁）。

[17] Davis, *American Heroine*, 5-10. きょうだいの絆は強かったとはいえ、ジェーンの姉のアリスが継母の長男と結婚し、さらに継母の次男がジェーンに求婚するなど、家族の関係は複雑であった。

(2) ロックフォード・セミナリー

16 歳になったジェーンは、進学先をめぐり父ジョンと対立していた。医師を目指してジェーンは、より高い教育を受けるべく、創立間もないスミス・カレッジへの進学を希望していた。この頃を振り返り、1910 年に出版した『ハル・ハウスでの 20 年』の中で彼女は、セミナリーでの勉学を終える頃にはますます、「医学を学んで「貧しい人びとと共に生きる」べきであるとの考えが私の心の中にどっしりと根を下ろしていた」と述べている[18]。ジョンは女性も教育を受けるべきであると考えていたものの、彼の考える女性に対する教育とは、専門職に就くためではなく、良き妻・母となるためのものであった。結局ジェーンは、父の希望通り、姉メアリも通ったロックフォード・セミナリーへ進学することになる[19]。

1877 年 9 月にジェーンが入学したロックフォード・セミナリーは、アンナ・シル（Anna Peck Sill）によって 1851 年開学した。マウント・ホリヨークをモデルにしたとも言われているが、初代校長シルの目的は、女性を社会の中で輝かせることよりも、「家庭を高め、浄化し、際立たせること」にあった。自らは学校設立のために東部から西部にやってきた独身者であったが、家族の中心としての女性の役割を重視し、セミナリーの使命は未来の妻であり母を教育することにあると考えていたのだった。また彼女は、「生の真の目的は、…多くの役に立つものを手に入れることではなく、自分を完全かつ立派に他者のために与えるという偉大なキリストの教えを伝えること」にあり、「聖書こそが実用的な道徳の唯一にして真のテキストブック」であると述べ、この学園が教育と伝道の交差点となることを目指していた。こうした学生を伝道者たらしめんとする福音派キリスト教の影響力の強さや、女性に家族とその要求を重視させ、家庭のかなめにすることを教育目的としたロックフォード・セミナリーでの日々は、ジェーンにディレンマをもたらすことになる[20]。

ジェーンが入学した頃も、開学当初の雰囲気にあまり変化はなかった。クエーカーに強く共感する父ジョンの影響もあって、ジェーンはセミナリーの福音派キリスト教的雰囲気に悩まされる。社会哲学、歴史、文学などどの科目も成績が良く、堅苦しいまでに行儀も良い彼女は、よきクリスチャンとして女性宣教師になることを周囲から勧められるが、それを「福音主義的抑圧」として拒否した。一方で、セミナリーは彼女の人生に大きな影響を与える人物のひとり、エレン・ゲーツ・スター（Ellen Gates Starr）との出会いをもたらした。陽気で人好きのするエレンは、真面目でどちらかという堅苦しいジェーンとは対照的であったが、意気投合したふたりは親友となる[21]。家庭の

---

[18] Knight, *Citizen*, 77; Addams, *Twenty Years at Hull House*, 36.

[19] Davis, *American Heroine*, 9-10; Knight, *Citizen*, 76-81.

[20] Davis, *American Heroine*, 11; Knight, *Citizen*, 80; *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 685.

[21] ジェーン・アダムズは、友人たちに自分のことをジェーンではなく「ミス・アダムズ」と呼んでくれと頼んで、彼女たちを困惑させた（ルイ・メナンド（野口良平・那須耕介・石井素子訳）『メタフィジカル・クラブ―米国 100 年の精神史』、みすず書房、2021 年［2011 年］、307 頁）。Davis, *American Heroine*, 13）。

事情でエレンは1年後にセミナリーを去ったが、その後もふたりは頻繁な手紙のやり取りを通じて友情を育んでいった。そのエレンへの手紙の中でジェーンは、「キリストは私を助けてはくれない。というのも、私が彼を評価していないのだから…。私はたんに彼のことをずっと昔に生きていたユダヤ人としてしか考えていない」と、セミナリーの雰囲気になじめない自分について告白している[22]。しかし、イエスをユダヤ人としてしか考えてこなかったと言っても、ジェーンはキリスト教を信仰していなかったわけではなく、信仰が果たすべき役割について悩んでいたのであった。地域の問題に積極的に取り組む父の姿に大いに影響を受けて育ち、社会の役に立つことこそがその人の存在意義であると考えるジェーンにとって、宗教や信仰が実生活や社会において果たす役割が重要だった。その彼女がやがてたどり着く先は、宗教とはキリスト教の教義ではなく、人類にとっての倫理的規範（道徳原理）であり、信仰とはそれを実現することであるという考えであった[23]。

女性がはじめて大量に大学に進学し、卒業後に専門職に就く者が出てくる第一世代の女子大生は、ジェーン同様、自分たちが学んだことを社会に還元し、社会にとって有用な存在となることの重要性を、共通の意識として持っていた。ジェーンは、シカゴで教師として働いているエレンに、大都市で働くことは「寄宿舎で得る以上の独立独行（self-reliance）と教育をあなたにもたらすことでしょうね」との手紙を送り、一足早く社会に出て教師として社会に奉仕しているエレンと比較して、漫然と知的刺激のない授業を受けていることへの焦りを仄めかしている[24]。それでも学生生活を送る中で、その後の生活の足掛かりを得てゆく。たとえば、マーガレット・フラー（Margaret Fuller）を引き合いに出して女性の力を力強く肯定し、学校で学んだことや身につけたことを社会に還元する重要性を学生に訴えかけたキャラライン・ポッター（Caroline Potter）の授業は、ジェーンに大きな影響を与えた。大学3年だった1880年の弁論大会で、ジェーンが行った「ブレッド・ギバー（Bread Givers）」と題した演説に、それはよく表れている。

> 私たちの存在が、この50年間に女性の野心や向上心において生じた変化を表している。変化は、教育において最も著しいことが分かる。（教育は）社交上の心得やもてなしの技から、知力や直接雇用労働のための能力の開発へと変化してきた。（教育を受けた）女性は男性になりたいわけではないし、男性のようになりたいわけでもなく、自律した思考や行動に向けて（男性と）同様の権利を主張しているだけである。この動きが、投票箱に向かうものであろうと、あるいは……同等の知的な利益を得ようとするものであろうとも、確かなことは、女性は自らの可能性への新しい自信と自らの着実な進歩に対するより生き生きとした希望を持つよう

[22] Higomoto, “Jane Addams and Hull House,” 142；Davis, *American Heroine*, 15.
[23] Higomoto, “Jane Addams and Hull House,” 142-143. 木原『ジェーン・アダムズ』、36－37頁。
[24] Davis, *American Heroine*, 14.

になったということである[25]。

女性に課せられた伝統的な役割を否定はしないが、教育を受けた女性として自律した思考や行動に基づき、家庭だけではなく社会にとっても役立つ存在でありたいとのジェーンの思いが読み取れよう。

(3) グランド・ツアー

1881 年 6 月に優秀な成績でロックフォードを卒業したものの、目標がはっきり定まらないまま混迷の日々を過ごしていたジェーン・アダムズを、8 月、最愛の父の急死という悲劇が襲う。さらに医者になる夢を実現させるため、10 月にフィラデルフィアの女子医科大学に入学したものの、在学中に健康を害し、入院を余儀なくさせられた。翌年 4 月に退院し、シーダーヴィルに帰郷したジェーンは、失望と自己嫌悪とに苛まれ、結局中退を決意する。シーダーヴィルに戻った彼女に、精神的不調に苦しむ兄ウェーバーに代わって家族の財産を運用し、近くに住む姉メアリの子どもたちの世話をするという、家族としての責任が重くのしかかった。再び体調不良に陥ったジェーンに体調回復のためのヨーロッパ旅行が提案され、1883 年から 85 年にかけて、アイルランドを皮切りに、スコットランド、イングランド、オランダ、ドイツ、イタリア、オーストリア、スイス、フランスと旅をして回ることになった。ロンドンでは、みすぼらしい姿の人びとが傷んだ食べ物を求めて群がる光景を目の当たりにし、ジェーンは怒りと絶望にかられる。ドレスデンでは、雪の降るなかを醸造したての熱いビールが入った重い木製のタンクを担ぎ、建物まで運んでいる女性たちを見かけた。ジェーンは醸造業者にこの酷い労働状況を改善するよう抗議したが、業者は「腹立たしいほどに無関心」であった。抗議は功を奏さなかったが、ジェーンは行動したことには満足を覚えたようである[26]。

帰国後の 1885 年、ジェーンはシーダーヴィルの長老派教会で受洗し、信者となった。また、レフ・トルストイの著作に触れ、キリスト教徒としてヨーロッパで目にしたような貧困をなくすために行動しなければならないとの思いを強くした。他方、帰国後の単調な生活はジェーンを深い憂鬱の中に引きずり込み、彼女を「精神的にどん底」の状態に追い込んだ[27]。そんな中、1887 年、二度目のヨーロッパ旅行に出かけることになるが、この旅行が彼女の人生にとってターニングポイント

---

[25] Jean Bethke Elshtain (ed.), *The Jane Addams Reader* (New York: Basic Books, 2002), chap. 2, Kindle; Higomoto, “Jane Addams and Hull House,” 144.

[26] Knight, *Citizen*, 109-139; Davis, *American Heroine*, 37; Addams, *Twenty Years at Hull House*, 39-44. なお、1882 年 2 月に、セミナリーからカレッジとなったロックフォードから学位を授与されている。

[27] Linn, *Jane Addams*, chap. 4, Kindle.

となる[28]。

今度の旅では、ドイツ、イギリス、フランス、オーストラリア、イタリア、スペインを回った。二度目の訪欧には親友のエレン・ゲーツ・スターも同行し、ふたりは友情をいっそう深めた。マドリッドでの闘牛見物をはじめ、さまざまな体験をしたが、なかでもジェーンに大いに刺激を与えたのは、ロンドンはイーストエンドに位置する、世界初とされるソーシャル・セツルメントのトインビー・ホール訪問であった[29]。

トインビー・ホールは、44 歳のイギリス国教会牧師サミュエル・バーネット（Samuel Barnett）とその妻で 37 歳のヘンリエッタ（Henrietta Barnett）によって、1884 年 12 月に開設され、キリスト教的慈善と社会的福音を交えた理論に基づいて、イーストエンドの貧しい人びとの救済が目的とされた。姉にあてた手紙の中で、トインビー・ホールは「大学人の共同体で、彼らは……貧者と共にそこに住み、娯楽のための集まりや団体を持っている。「専門家による慈善（professional doing good）」からは自由で、心から誠実で、講習や図書室を通じて良い結果を生み出しているがゆえに、全く理想的に思える」と述べている。常松が言うように、ジェーンにはトインビー・ホールが、大学卒業者にとって学生時代の「大学寄宿舎の魅力と連帯感」を享受でき、同時に自分が学んできたことを社会に還元しうる好機と映った。さらに彼女を驚かせたことに、トインビー・ホールは労働運動へ積極的に関与していた。それまで、労働組合やストライキについてほとんど知らなかったジェーンは、ロンドン滞在中にイーストエンドで起こったマッチ工場労働者のストライキ集会に参加している。とはいえ、労働者が置かれた過酷な状況に改めてショックを受けつつも、この頃の彼女はまだ、労働組合や労働運動についてさほどの理解や共感を持っていなかったようである。ジェーンは、貧困が身体に与える問題の解消が心に与える問題の改善よりも優先されるとは信じておらず、そのため、トインビー・ホールのレジデントたちが賃金や労働条件の改善に積極的に関与していることに驚きを禁じ得なかった。こうしたレジデントの行動よりもむしろ、救済を受ける側と与える側双方の「魂の救済」というホール創設当初の哲学にジェーンは強く印象付けられ、貧困を生み出す資本主義の問題ではなく、貧困が労働者の精神や生活にもたらす問題について考えさせられた。1888 年、帰国したジェーンは、エレン・スターとともにセツルメント開設に乗り出すこ

[28] Knight, *Citizen*, 146-154. 二度目の旅行中、トルストイとも面会している。

[29] ルイ・メナンドの言葉を借りると、ソーシャル・セツルメントとは、「都会の貧困地域にあって、「セツラー」と呼ばれるカレッジ卒業者たちが社会改革を目指して生活し、働いた建物」であった（メナンド『メタフィジカル・クラブ』、307 頁）。ちなみに、マドリッドの闘牛見物は、その後の彼女の行動を説明するうえで、しばしば引き合いに出されるエピソードである。闘牛見物をした際、その残酷さに同行者が中座するなか、アダムズだけは楽しみ、それを友人たちにとがめられ、当惑する。しかしすぐに自分の行為を振り返り、「自分の個人的な快楽のために残酷な行為を是認することは、少数者の贅沢や快楽のために、多くの人びとの人間的な尊厳を奪う形態そのものを黙認すること」であると、良心の痛みとともに自覚したという（木原『ジェーン・アダムズ』、57－58 頁）。

とになる[30]。

2　初期のハル・ハウス

(1) ハル・ハウス設立へ

1888 年末、ヨーロッパから帰国したアダムズは、相変わらず家庭の事情に悩まされながらも、与えられた人生ではなく、自分で選んだ人生を始めることを決意する。

1889 年 1 月、セツルメント開設のため、アダムズはエレン・スターとともにシカゴへと赴く。当時、シカゴの約 100 万人の住民のうち 78％が外国生まれ、あるいはその 2 世で、特に東欧・南欧系の住民が急増していた。市として承認された 1837 年には人口わずか 4.000 人程度であったシカゴは、精肉業を中心とした食品産業や鉄道の結節点という地の利を生かした穀物取引業、それに関連した刈取機製造のマコーミック社、寝台車製造のプルマン社のような製造業が中心となり、特に南北戦争後に急成長を遂げる。この急成長を支えたのは、移民であった。しかし職を求めて大勢が集まってきた結果、労働力過剰となり、低賃金や過酷な労働条件が常習化し、労働運動が激化、社会主義やアナキズムが広がっていた。この頃のシカゴの印象を、1891 年に訪れたポーランドのピアニストでのちに首相となるイグナツィ・パデレフスキ（Ignace Jan Paderewski）は「スピード、スピード、スピード」と言い表し、1889 年に訪れたラドヤード・キップリング（Rudyard Kipling）は「絶対に二度と見たくない。野蛮人の住まいだ」と言い放っている[31]。

シカゴのどこに開設するかをめぐり、アダムズとスターの間で話し合いがもたれ、その結果、ホルステッド通りに面したウエストサイドの第 19 区に建つチャールズ・ハル（Charles J. Hull）の旧邸宅を借りることになった。ハル邸が建てられたウエストサイド地区は 19 世紀中葉までは郊外の住宅地であったが、急激な工業化とそれに伴う都市化に飲み込まれ、70 年代半ばには郊外とはいえなくなっていた。19 世紀末には、1871 年のシカゴ大火で焼け残った数少ない建物のひとつであるハル邸も含めて、その地域の邸宅は倉庫や商店に転用されたり、工場建設のため破壊されたりしていた。倉庫や工場周辺には安全性や衛生面で大いに問題のあるテネメントと呼ばれる長屋風アパートが建ち並び、大火後のバラックも残存するなか、旧ハル邸が建つホルステッド通りもまたスラム街の一角を構成していた。第 19 区の 5 万人近い住民の多くは、食肉工場やスウェットショップ――衣服製造業における下請けで、テネメントが作業場となっていた――などで働く非熟練労働者で、エスニシティで見ると、アイルランド系、ドイツ系に加えて、イタリア系、ボヘミア系が多

---

[30] 常松「改革者ジェーン・アダムズ」、74 頁。石井素子「〈研究ノート〉シカゴでの邂逅―ジョン・デューイとジェイン・アダムズ」『龍谷大学教育学会紀要』第 21 号、2022 年、27 頁。Allen F. Davis, *Spearheads for Reform: The Social Settlement and the Progressive Reform, 1890-1914* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1994 [1967]), 3-8; Knight, *Citizen*, 159-175; Davis, *American Heroine*, 49-51.

[31] Knight, *Citizen*, 186-187. 常松「改革者ジェーン・アダムズ」、76－78 頁。ハル・ハウス近隣住民の出身国は 18 か国に上ったとされる（メナンド『メタフィジカル・クラブ―米国 100 年の精神史』、308 頁）。

かった。人口過密に伴う住宅不足やごみ問題も深刻で、伝染病の蔓延も見られた。またこの地域には、9 つの教会に対して 250 軒もの酒場が建ち並んでいたという [32]。

89 年当時の旧ハル邸所有者は、ハルのいとこのヘレン・カルヴァー（Helen Culver）であった。粘り強い交渉の結果、1 階に酒場、オフィス、家具会社の倉庫が入っていた 2 階建てのこの建物を賃貸することに成功したアダムズとスターは、1889 年 9 月、ハウスキーパー役のメアリ・カイザー（Mary Keyser）とともに、引っ越した [33]。

若い女性によるセツルメント・ハウス開設は、彼女たちが引っ越す前から評判を呼んだ。「金持ちと貧しい人びとを近づけるための計画」と題されたハル・ハウスに関する『シカゴ・トリビューン』の記事の中でアダムズは、「自由になる財産と寛大な気風を持つ若い女性」と称され、彼女の計画は「富者と貧者の利点の相互交換」による救済活動と説明された [34]。しかし多くの新聞や雑誌の記事は、ハル・ハウスを貧民救済活動として伝え、その慈善的側面ばかりを強調した。それは、なぜ育ちの良い若い女性がスラムに住み、貧しい人びとのために働くのかを問う中産階級の読者が望む回答であった。つまり、不運な人びとを助けたいという生来の気質に突き動かされた敬虔な女性たちが、自らの快適な生活を捨てて他者のためにとった行動というヴィクトリア朝的自己犠牲の物語の中に、ハル・ハウス開設の動機も回収されたのである。一方、ルーシー・ストーン（Lucy Stone）が創刊した『女性ジャーナル』に掲載された「シカゴのトインビー・ホール」と題された記事の中では、以下のように述べられている。

> （ハル・ハウス設立の主な目的のひとつは）若い女性たちに隠れ家を提供することだろう。彼女たちは、休息と変化を必要とし、社会の法外な要求からの安全な避難所を必要としている。ここで彼女たちは、生活のもう一方の面、つまり世の中の半分の人びとが直面している貧困との闘いを垣間見て、より広範な博愛の念やより柔らかな共感を得るだろうし、内省や利己的な野心、実際の、あるいは空想上の病弱さの愛好といったことであまり時を費やさなくなるだろう、と考えられている [35]。

ストーンのような女性参政権運動家からも、アダムズやスターの活動動機は、従来のヴィクトリア朝的女性像から解釈されていたのである。

---

[32] Davis, *American Heroine*, 58-59; Knight, *Citizen*, 199；Addams. *Twenty Years at Hull House*, 54-56; Ernest C. Moore, “The Social Value of the Saloon,” in Mary Lynn McGree Bryan and Allen F. Davis(ed.), *100 Years at Hull House* (Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1990 [1969]), 49-50; 常松「改革者ジェーン・アダムズ」、77 頁。メナンド『メタフィジカル・クラブ』、308 頁。

[33] Addams, *Twenty Years at Hull House*, 53-54.

[34] Davis, *American Heroine*, 60; Knight, *Citizen*, 191; “To Meet on Common Ground: A Project to Bring the Rich and Poor Closer Together,” *Chicago Tribune*, March 8, 1889.

[35] メナンド『メタフィジカル・クラブ』、309 頁。

しかし、ハル・ハウス開設の動機は、そう単純ではなかった。産業化、都市化の急速な進展で社会的弱者が発生していることをセツルメントが必要である理由として挙げた「ソーシャル・セツルメントの客観的価値」に対して、これと対になるもうひとつの論文「ソーシャル・セツルメントの主観的必要性」の中でアダムズは、ハル・ハウスが移民や都市の貧民たちのものであると同時に、大学教育を受けながらそれを生かせない――アダムズはそれを「理論（theory）と生（lives）の間の調和の致命的な欠如、すなわち思考と行動の間の連携（coordination）の欠如」と表現している――上層中流階級の若い男女、特に大学教育を受けた女性にとっての受け皿でもあると述べている。幼いころから献身的で自己犠牲的であるように、私欲の前に公共善を考えるように、と教えられてきた女性たちが、大学卒業後に「最下層の人びと」にその利他的精神を発揮しようとすると、今度はその行動を無分別であるとかふさわしくないとかと言われ、家族から反対される。家族の要求に悩み、かつ自分の教育や能力のはけ口を見つけられない女性たちは、自らを社会不適応者、役立たずと感じるようになり、そこから逃げ出すためにセツルメント活動に関わるようになったと説明する。つまりハル・ハウスの設立は、自己犠牲というよりもむしろ自らが社会にとって役に立つ存在であるために必要なこと、換言すれば「自己救済としての社会改革」でもあった。アダムズは論文の最後を、全体の向上と改善なしには誰も自分の道徳的・物質的な状況の改善を望めないこと、すなわちソーシャル・セツルメントの主観的必要性とは社会的であり個人的でもある救済の必要性のことである、と締めくくった[36]。

(2) 初期ハル・ハウスの活動

1889 年 9 月 18 日、ハル・ハウスに引っ越したアダムズとスターは、ジョン・ラスキン（John Ruskin）やウィリアム・モリス（William Morris）の文化・芸術による生活向上理論に共鳴していたこともあり、ヨーロッパで購入した名画の複製を壁に掛け、近隣住民を招き入れ、その絵について説明を始めた。また、近隣地区のイタリア系移民のために、フィレンツェの写真を鑑賞しながら、ジョージ・エリオット（George Eliot）の『ロモラ』を読むという企画も立てた。これは、セツルメント・ハウスの主要な仕事のひとつは、スラムで生きる人びとの文化的貧困の解消であるというトインビー・ホールのやり方に強く影響を受けた行動であった[37]。

2 階部分と 1 階の応接室を借りてスタートしたハル・ハウスは、90 年春に 1 軒丸ごと借りることに成功し、1891 年には 4 年間の賃貸契約に踏み切り、南側の隣接地にアート・ギャラリー（Butler

---

[36] Jane Addams, “The Objective Value of a Social Settlement,” in Elshtain (ed.), *The Jane Addams Reader*, chap. 5 Kindle; Jane Addams, “The Subjective Necessity for Social Settlements,” in Addams, *Twenty Years at Hull House*, 63-71. 緒方「大卒女性の第一世代」、16－17 頁。

[37] Addams, *Twenty Years at Hull House*, 54-56; Bryan and Davis (ed.), *100 Years at Hull House*, 5. メナンド『メタフィジカル・クラブ』、309 頁。

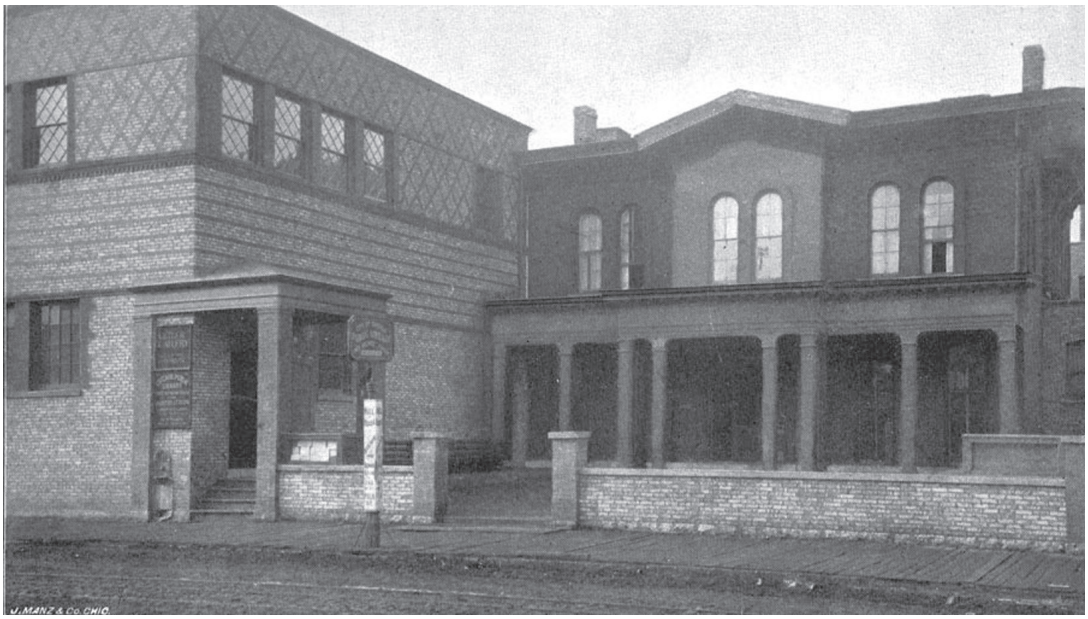

写真　1891 年頃のハル・ハウス。左側の建物は 1891 年に建てられたバトラー・アート・ギャラリー。
https://www.swarthmore.edu/library/peace/Exhibits/janeaddams/photoshullhouse/HH1.jpg
（2023 年 12 月 28 日アクセス）

Art Gallery）を建設するに至る【写真】。ギャラリーは 2 階建てで、公立図書館分館も入り、クラブ活動や授業が行われた。1893 年に 7 年間の賃貸契約を結ぶと、今度は 1 階にコーヒーハウス、2 階にジムを備えた建物を建設する。また 1895 年には旧ハル邸に 3 階が増築され、幼稚園、託児所、音楽スクールのための部屋を備えた子どもハウス（Children's House）がつくられた。翌年、男性レジデントのためにアート・ギャラリーに 3 階が増築された。1898 年には働く少女が共同で生活するための建物が建てられ、99 年には新しいコーヒーハウスがつくられる。1900 年には労働博物館、1907 年には建築としては最後となる保育所を完成させ、最終的に合計で 13 ものビルを所有するに至った。加えて 1912 年に、ハル・ハウスの活動に共鳴した資産家のルイーズ・ボーエン（Louise de Koven Bowen）から野外施設を譲り受け、ボーエン・クラブと名づけて、青少年の野外活動に活用した。こうして、コミュニティの必要に応じて、ハル・ハウスの施設はどんどんと拡大していった[38]。

設立当初は主に恵まれない子どもたちに文学や芸術を学ぶ機会の提供を想定していたハル・ハウ

[38] Bryan and Davis(ed.), *100 years at Hull House*, 6-7; 木原『ジェーン・アダムズ』、101－102 頁。ハル・ハウスは 1895 年に組織化され、理事会が発足した。ヘレン・カルヴァー、メアリ・ロゼット・スミス（Mary Rozet Smith）、ルイーズ・ボーエンのような理事たちは、ハル・ハウスを財政的にも支えた（Eleanor J. Stebner, *The Women of Hull House: A Study in Spirituality, Vocation, and Friendship* (New York: State University of New York, 1997), 147-181.）。

スのプログラムや活動は、施設の拡大にあわせて、その後 10 年間に広がっていった。温かい昼食の提供にはじまり、多彩な授業や講義、職業教育、家事訓練、スポーツ大会、芸術や哲学の講演会に加えて、合唱、演劇、読書、手芸、スポーツなど少年向け、少女向け、成人男性向け、成人女性向けのさまざまなクラブが主催された。また、シカゴ大学の公開講義や古代ギリシア美術に関する講演会、展覧会が開かれる一方、移民がアメリカで新生活を営むにあたり大切なもっと基本的なこと、たとえば英語やアメリカ政治の仕組み、あるいは行政手続きについて教えるクラスも設けられた[39]。開設のごく初めこそ、定期的に夕べの祈りを行うなど宗教的な雰囲気が漂ったが、間もなくそれも薄れた。アダムズとスターは、セツルメントにやってくる人びとにプロテスタントの教育を施したり、改宗を迫ったりしないことを決めていて、イエス・キリストも救済者というよりも手本あるいは教師とみなす姿勢をとっていた。宗教にこだわらない運営方針をとるアダムズは、「アナキスト」の日曜学校――そこでは、ドイツ移民の親に連れられてアメリカにやってきた子どもたちが、「いかなる宗教や政治」にも影響を受けず自由に思考することの重要性を学んでいた――にも、福音派キリスト教徒の日曜学校にも参加し、時にはそこで教えていた[40]。

この姿勢は、シカゴの保守的な福音派コミュニティから批判されたが、シカゴ女性クラブのような福音派プロテスタントにあまり影響を受けていない団体からは歓迎され、また当時急増していたイタリア人やユダヤ人のようないわゆる「新移民」をハル・ハウスに引き寄せることになった。以前から、セツルメントのプログラムの目的は外国生まれの人びとを保護し、「いかなるものだろうと彼らがこれまで抱いてきた価値を包含し続け、彼らをアメリカのより良い人びとと接触させる」ことであると考えていたアダムズは、アメリカ的生活様式を教えることによって都市で移民たちが暮らしてゆけるよう手助けする一方、彼らの価値観も重視するよう努めた。しかし、時にはそれに困難を感じることもあったようである。たとえば、近隣地区の移民の多くにとって飲酒や酒場が社交的重要性を持っていることを理解はするものの、中西部育ちのプロテスタントである彼女にとって、なかなか受け入れがたい考えであったため、酒場に代わる社交の中心地としてのコーヒーハウス――簡単な食事とノン・アルコールの飲み物が提供された――をつくった。アダムズによると、最初は酒が供されないコーヒーハウスに懐疑的だった近隣住民も、ここが「ソーシャル･センター」のような役割を果たすことを知るにつれ、次第に受け入れていった。近くの工場に勤める人や公立学校の教師が仕事帰りに使うようになり、ハル・ハウスのメンバーやよその団体の人もここで一緒に食事をしたり、同窓会や宴会を開いたりするようになった。この経験からアダムズは、自分たち

[39] Hull-House, *Weekly Program of Lectures, Clubs, Classes, etc*. (March 1st, 1892), accessed December 8, 2023, https://preview.babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=osu.32435055622328&seq=1.

[40] Knight, *Citizen*, 193-194. アダムズによると、このアナキストは、「コミュニスト」タイプではなく「個人主義者」であり、個人の自由を何よりも重視していた。

のやり方に固執するのではなく、近隣住民の状況に応じて試みを修正したり適応させたりすべきであることを学んだと述べており、支援には柔軟性が必要であると考えていたことが分かる[41]。

前述したように、活動を始めた当初のアダムズは、貧困が身体に与える問題の解消が心に与える問題の改善よりも優先されるとは考えていなかったし、貧困を生み出す資本主義のあり方が問題であるとも思っていなかった。貧困が人間の体を蝕むこと以上に、精神を蝕むことの方が問題であると考えていたのである。セツルメント運動を開始した当初の彼女にとって重要なことは、貧困を食い止めることよりもむしろ、人びとの精神の改善や強化にあった。しかし間もなく、そうした考えは決定的に変化してゆく。そして、20 世紀に入る頃までには、自分の仕事は「貧者を慰めることよりもむしろ、貧困を排除すること」であると、アダムズは信じるようになっていた[42]。

(3) ハル・ハウスのレジデント、協力者

アダムズが考えを変えた背景には、多彩な協力者やレジデントの存在があった。ハル・ハウスでは、女性を中心とする大勢の人びとがフルタイム、あるいはパートタイムのレジデントとして働いていた。

ハル・ハウスは女性組織とイメージされることが多いが、男性のレジデントや協力者も少なくなかった。のちに全国コミュニティセンター会議事務局長になるエドワード・バーチャード（Edward Burchard）は、ハル・ハウス最初の男性レジデントで、ハル・ハウスの警備や宣伝活動に従事した。1901 年頃にレジデントとなった都市計画専門家でシカゴシティクラブ理事のジョージ・フッカー（George E. Hooker）は、セツルメント運動のためのロビー活動に関与し、1935 年のアダムズ葬儀の際には棺の担ぎ手を務めた。また、編集者で作家のフランシス・ハケット（Francis Hackett）、のちにゼネラルエレクトリック社社長になるジェラード・スウォープ（Gerard Swope）も短い間ながら住み込みのレジデントであったし、歴史家のチャールズ・ビアード（Charles Beard）や 3 期にわたりカナダ首相を務めることになるウィリアム・ライアン・マッケンジー・キング（William Lyon MacKenzie King）も、ハル・ハウスのよき理解者であり、協力者であった[43]。これらハル・ハウスの協力者である男性のうち、アダムズの活動に最も大きな影響を受け、また彼女の思考や行動に多大な影響を与えたのは、ジョン・デューイであった。

デューイは、ミシガン大学在職時の 1892 年 1 月にゲスト講師としてハル・ハウスを初めて訪問

---

[41] Addams, *Twenty Years at Hull House*, 73; Davis, *American Heroine*, 72. メナンド『メタフィジカル・クラブ』、308－309 頁。当時第 19 区では 25 人に 1 軒、ハル・ハウス周辺 45 メートル四方に 3 軒の酒場があった。労働者に対して酒場がもつ機能を、コーヒーハウスやジムで代替させるべきとの意見は、ハル・ハウスに関わる多くの人びとによって共有されていた（Moore, “The Social Value of the Saloon,” in Bryan and Davis(ed.), *100 Years at Hull House*, 49-53)。

[42] Knight, *Citizen*, 200-201; Davis, *American Heroine*, 74.

[43] Davis, *American Heroine*, 74-74.

し、「心理学と歴史」と題した講演を行った。この訪問はデューイに大きな感銘を与え、ミシガンに戻った後、アダムズにあてて「滞在がどれだけ有益だったか、言葉に尽くせません」と書き送っている。1894 年にシカゴ大学に移ってからは、ハル・ハウスの労働社会科学クラブやサマースクールで講義を行い、しばしばハル・ハウスを訪問してはレジデントたちと意見を交わした。また、子どもハウス――困難を抱える子どもの生活支援の活動拠点として 1895 年に開館――に設置されたシカゴ・フレーベル協会の幼稚園教員養成学校では、心理学の講義を担当した。さらに、1895 年に設置されたハル・ハウス協会の理事に、97 年選出された。ハル・ハウスでの経験とアダムズとの交流は、その後のデューイの社会思想や実践に多大な影響を及ぼした一方、「コミュニケーションが破壊され虚ろな状態」においては「公共的なもの」が必要であるとしたデューイの言葉は、アダムズの活動の礎のひとつとなった[44]。

一方、ハル・ハウスの女性レジデントや協力者には、男性以上に多彩で多才な人々が集まった。そのなかには、のちに連邦労働省児童局初代局長となるジュリア・ラスロップ（Julia Lathrop）や 2 代目局長のグレース・アボット（Grace Abott）、ハーヴァード医科大学で初の女性教授となるアリス・ハミルトン（Alice Hamilton）、シカゴ大学教授の職に就くソフォニスバ・ブレッキンリッジ（Sophonisba Breckinridge）とイーディス・アボット（Edith Abbott）のように、ハル・ハウスでの活動を足掛かりとして、政府や専門機関、あるいは全国規模の社会運動のリーダーとして活躍することになる者も多く含まれていた。彼女たちは皆、アダムズと似たような環境で生まれ育っているが、そうではないメンバーもハル・ハウスにはいた[45]。

1903 年に女性労働組合連盟を結成するメアリ・ケニー（Mary Kenny）は、家計を支えるために 4 年生で学校をやめ、働きに出た。製本・印刷業で働く彼女は 1888 年にシカゴに移り、そこで知り合ったアダムズに招かれ、ハル・ハウスのレジデントとなる。1891 年に、働く女性に安価な部屋と食事を提供する共同宿泊施設「ジェーン・クラブ」を設立し、また後述するフローレンス・ケリー（Florence Kelley）とともに、労働者の労働環境改善のために尽力した。ケニーを通じてアダムズは女性労働者と知り合い、都市での彼女たちの生活の現実と労働運動について学び、理解を深めていった。1894 年にボストンへ引っ越していった後もケニーはハル・ハウスをしばしば訪問し、アダムズと交流を続けた。アルジーナ・スティーヴンズ（Alzina Stevens）もケニー同様、労働者階級の出身で、13 歳で紡績工場に働きに出て、その際に事故で右手人差し指を失った。離婚後に植字工となり、労働騎士団と協力しシカゴの労働運動をリードする存在となる。1892 年にハル・

---

[44] Knight, *Citizen*, 237-240; Davis, *American Heroine*, 96-98. 上野正道『ジョン・デューイ―民主主義と教育の哲学』岩波新書、2022 年、55－59 頁。メナンド『メタフィジカル・クラブ』、310－316 頁。石井「シカゴでの邂逅」、24－31 頁。

[45] Davis, *American Heroine*, 77-81; Knight, *Citizen*, 226-228, 276-277; Stebner, *The Women of Hull House*, 110-117, 128-140. 緒方「大卒女性の第一世代」、17－18 頁。

ハウスに加わったが、当時は必ずしもストライキやデモを肯定しないアダムズの姿勢に批判的であった。一方、ケリーとは『ハル・ハウスの地図と報告書』掲載の論文を共同執筆するなど、早い段階から協力関係にあった。1900 年に亡くなるまで、スティーヴンズは実際に工場労働を経験したことのある数少ないハル・ハウスの重要メンバーであり続けた[46]。

以上のように、ハル・ハウスは貧困者救済の場であると同時に専門職につくためのトレーニングの場となり、また学問的な実験場、社会改良のための運動の場であった。それに関わるレジデントや協力者は多彩であったが、なかでも、のちに全米消費者連盟初代書記長を務めることになるフローレンス・ケリーが、アダムズとハル・ハウスの両方に与えた影響は大きかった[47]。

3　フローレンス・ケリーとハル・ハウス

(1) 社会主義者フローレンス・ケリー

ジェーン・アダムズより 1 歳年上のフローレンス・ケリーは、フィラデルフィアの上層中流階級の家庭で育った。判事であり、また 1867 年から 90 年までペンシルヴェニア州選出の共和党連邦下院議員を務め、女性参政権を支持し、児童労働に苦しむ子どもたちの環境改善を目指すなど、進歩的な考えの持ち主であった父ウィリアムは、ケリーに法の重要性を教え込んだ。彼女は、この父に多大な影響を受けたと言われる。こうした生い立ちには、アダムズと共通している部分も少なくない。しかし、アダムズと異なり、ケリーは女子セミナリーではなくコーネル大学で法律を学び、特に子どもに関する法律について研究した。卒業後、法律を学ぶためペンシルヴェニア大学に願書を出したが、女性であることを理由に入学を却下された。1 年間、フィラデルフィアの夜学で女工たちを教え、1883 年に大学院としてはヨーロッパで唯一女性に門戸を開いていたチューリッヒ大学大学院に進学し、法律や行政学を学んだ。学位こそ取得しなかったが、大学院で法を学ぶ傍ら、さまざまな考えを持つ友人に出会った。在学中に社会主義者の集会に参加したケリーは、ヨーロッパの社会主義思想に感銘を受け、一時、ドイツ社会主義党やニューヨークの社会主義労働党にも入党し、1887 年にはフリードリッヒ・エンゲルス（Friedrich Engels）の『イギリスにおける労働者階級の状態』を英訳している。同年、大学同窓会で中産階級の同窓生を前に、資本主義制度を終わらせるために自ら「プロレタリアート」に加わったことを高らかに告げた[48]。

私生活ではケリーは、スイス留学中に知り合った社会主義者のロシア人医学生と 1884 年に結婚

---

[46] Davis, *American Heroine*, 76-80; Stebner, *The Women of Hull House*, 109, 173-174.

[47] Davis, *American Heroine*, 75-80; Knight, *Citizen*, 226-229.

[48] Kathryn Kish Sklar, *Florence Kelley & the Nation's Work: The Rise of Women's Political Culture, 1830-1900* (New Haven: Yale University Press, 1995), 3-168; Davis, *American Heroine*, 76-78; Knight, *Citizen*, 229-232; Bryan and Davis(ed.), *100 Years at Hull House*, 23-28; Stebner, *The Women of Hull House*, 117-123; Núria Font-Casaseca, "Hull House Maps and Papers, 1895: A Feminist Research Approach to Urban Inequalities by Jane Addams and Florence Kelley," in *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 526-527. 緒方「大卒女性の第一世代」、23 頁。メナンド『メタフィジカル・クラブ』、309－310 頁。

し、翌年には長男が誕生している。1886 年に一家でニューヨークに戻り、同年に長女、その 2 年後に次男をもうけた。しかし、医学の道に行き詰まり借金を抱えた夫が暴力を振るうようになったため、1891 年暮れに 3 人の子どもを連れて、緩い離婚法のイリノイ州シカゴへと逃れてくる。ひとまず女性キリスト教禁酒同盟の「ウーマンズ・テンプル」―― 1892 年に建設されたオフィスや宿泊室を備えた 12 階建てのビル――に落ち着いた彼女は、子どもたちを同団体が運営する働く母親のための保育園に預けて、そこで勧められたハル・ハウスへと向かう。アダムズはケリーにベッドと仕事を提供し、彼女の子どもたちが安全に住める場所を北部の町ウィネトカに手配した。ケリーは、シカゴにやってきたときにはすでにアメリカ国内外でたくさんの論文やパンフレットを出版しており、子どもと女性の労働問題に関する論客として名を知られていた。彼女が正式にハル・ハウスのレジデントになったのは、1892 年 1 月のことであった（1894 年とする研究者もいる）。以後、全米消費者連盟書記長として 1899 年にニューヨークに戻るまで、ケリーはレジデントとして「7 年間の幸せで活動的な歳月」を送る。その 7 年間に、社会主義者で無神論者のケリーはハル・ハウスに大きな変化をもたらすことになった[49]。

(2)『ハル・ハウスの地図と報告書』

アダムズやそのほかのレジデントよりもずっと急進的で、社会調査の専門家でもあるケリーは、ハル・ハウスを改革ならびに研究の拠点とすることにおいて、中心的な役割を果たした。当初の芸術的で文学的なハル・ハウスのプログラムに批判的だったケリーは、近隣地区をはじめシカゴに暮らす民衆の悲惨な生活状況にレジデントがもっと関心を持つよう仕向けた。その彼女が特に関心を持っていたのは、工場労働の現場ではなく、大勢の女性や子どもが従事するスウェットショップの制度についてであった。

ケリーは 1892 年春、イリノイ州統計局に特別調査官として雇われ、シカゴの女性労働者が置かれた状況とスウェットショップ制度を調査した。多国籍の人びと――ポーランド人、ボヘミア人、ナポリ人、シチリア人、ロシア系ユダヤ人――が暮らす不衛生な環境や過密ぶり、学齢期の子どもが 7,000 人以上いるのに学校に通っているのは 2,579 人にすぎない第 19 区の教育現状、共同体にとって大いなる脅威であるところの児童労働やスウェットショップの存在など、調査の過程で目にした光景をエンゲルスにあてた手紙の中で語った。またケリーは「私は仕事へ行く」で、ハル・ハウス周辺のテネメントでは、ようやく椅子に座れるようになったばかりの 18 か月の子どもでさえ、しつけ糸を引っ張って親を手伝っていること、ハル・ハウスの幼稚園で体を動かして遊ぶ合間に針を使って馬や犬やオウムを作って喜んでいる子どもが、家ではその針を使って衣服のボタン付けを

[49] Sklar, F*lorence Kelley & the Nation's Work*, 171-172; Florence Kelley, "I Go to Work," in Bryan and Davis(ed.), *100 Years at Hull House*, 23-28; Knight, *Citizen*, 232.

行っていることを報告し、そうした光景を目撃すると「ひどく胸が痛む」と述べている。ケリーは、こうした児童労働に強く反対し、参加した労働者の集会ではその根絶を訴えかけ、調査結果を報告書にまとめては公表した。彼女の活動は功を奏し、スウェットショップの状況を看過できなくなったイリノイ州議会は 1893 年、女性と児童の労働に関する調査委員会を設置した。ヴォランティアのガイドとしてケリーは、メアリ・ケニーとともに、スウェットショップであるところの住居兼下請け作業場のテネメントが建ち並ぶハル・ハウス近隣地区に委員会メンバーを案内した。3 月に委員会は報告書を公表し、93 年 7 月、女性の労働時間を制限、児童労働を禁止、加えてテネメント内のスウェットショップの査察の基準と手続きを定めたイリノイ州工場法案が議会で可決され、イリノイ州知事ジョン・オールトゲルド（John P. Altgeld）の署名によって発効するに至る。スウェットショップの実態を広く知らしめるケリーとハル・ハウスの人びとの活動が、実を結んだのである [50]。

1893 年工場法に定められた査察のため、進歩的な州知事であったオールトゲルドはケリーを首席監督官に任命した。首席監督官となったケリーは、ケニーやアルジーナ・スティーヴンズなどハル・ハウスのレジデントをスタッフとして雇い、彼らとともに児童労働の根絶、労働環境の改善、女性の 8 時間労働実施のために懸命に働いた。活動にあたってもっと法に関する知識や資格が必要と考えた彼女は、夜間にノースウェスタン大学ロースクールの学生として 1 年間学び、その後すぐイリノイ州の弁護士として認められている。しかし 1897 年にオールトゲルドが再選に失敗したことに伴って、ケリーも首席監督官のポストを失い、その 2 年後、シカゴを去りニューヨークに戻っていった [51]。

1892 年以降、こうした活動に触発されたハル・ハウスのレジデントやヴォランティアたちは、ケリーとともに、スウェットショップ制度下での過酷な労働状況に関する調査に乗り出した。彼らは、ハル・ハウスが建つ地区の家庭を戸別訪問し、国籍および収入を尋ね、家計収入が週 20 ドル以上の家庭は金色、5 ドル以下であれば黒で塗り分けた収入地図（income map）を作った。調査自体は 1893 年にほぼ終了し、この地図は 1895 年に『ハル・ハウスの地図と報告書（以下『地図と報告書』）として出版された本にも収められたが、ハル・ハウス近隣地区は黒が圧倒的だった。地図は、単なる統計や報告書では持ちえない具体像を読み手に提供した。『地図と報告書』には、地図や写真のほかに、アダムズの「労働運動におけるファクターとしてのセツルメント」、ケリーの「スウェットショップ制度」を含む 10 本の報告が収められている。ケリーが主導して作られたこの

---

[50] Stebner, *The Women of Hull House*, 123-124; Kelly, “I Go to Work,” 24; Dorothy Rose Blumberg, *Florence Kelley: The Making of a Social Pioneer* (New York: Augustus M. Kelley, 1966), 127-128, 133-135; Sklar, F*lorence Kelley & Nation's Work*, 222-223, 233-236. 緒方「大卒女性の第一世代」、25 頁。

[51] Stebner, *The Women of Hull House*, 124-125; Blumberg, *Florence Kelley*, 137-148; Sklar, *Florence Kelley & Nation's Work*, 238-239, 248; Font-Casaseca, “Hull House Maps and Papers, 1895”, 529-531. 緒方「大卒女性の第一世代」、26 頁。

本の序文でアダムズは、本書がロンドンの賃金マップを掲載したチャールズ・ブース（Charles Booth）の『ロンドンの人びとの労働と生活』に倣ったものであること、筆者は全員ハル・ハウスのレジデントで、社会学的調査が目的ではなく、セツルメント運動を建設的に進めるために調査を行ったこと、ゆえにこの本はあくまでも自分たちがよく知る地域の記録にすぎないことを強調している[52]。売れ行きは芳しくなく間もなく絶版になるものの、同書はアメリカの労働者階級が住む都市地区に関する最初の調査・研究として受け止められ、ハル・ハウスは社会改革の中心として、また社会学の実験室として、世間からみなされるようになってゆく[53]。

(3) ハル・ハウスの変化

すでに述べたように、設立当初のハル・ハウスは、シカゴの最も貧しい地区のひとつである第19区――新来移民の多くはスウェットショップで極めて低賃金で働いていた――において、どちらかと言えば芸術鑑賞や読書会、クラブ活動のような文化活動を主にした支援を行っていた。ところが、従来とは異なる理論や調査方法を用いるケリーの登場で、その方向性に変化が生じた。ケリーは社会学的調査の方法をレジデントたちに教え、物事を始める前に世論や政治家を納得させるに足る調査をするという習慣（調査、世論喚起、社会運動、法制化という手続き）を、ハル・ハウスに定着させた。木原によれば、これは今日の社会福祉調査にも影響を及ぼしているとされる。そして、この社会学的調査が行われたからこそ、1893 年に工場法が成立したのである[54]。

ケリーが行ったスウェットショップ制度の実態に関する調査や貧困を可視化した『地図と報告書』の出版は、アダムズをはじめとするハル・ハウスに関わる多くの人びとに、物質的欠乏が人の精神にもたらすのと同じかそれ以上に深刻な身体にもたらす影響と、その改善の重要性を改めて認識させた。トインビー・ホールの創設者バーネットは、レジデントにとっては貧しい人びととの兄弟的な接触によってよりよく魂が救われるという恩恵が施され、貧しい人びとにとっては提供される文学や芸術に触れることで文化的貧困から救われ、精神的な向上が図られると信じていた[55]。トインビー・ホールから着想を得たアダムズも、当初はこうした方針に基づいて、ハル・ハウスの教育的プログラムの提供を中心とした活動を構想していた。しかしこれに懐疑的なケリーは、科学的な調査に基づいて、より社会的な支援のあり方、換言すると社会改革をハル・ハウスに持ち込んだのだった。こうしたケリーの存在は、その行動的でエネルギッシュな姿勢やカッとなりやすく歯に

---

[52] Kelley, “I Go to Work,” 25-26; Blumberg, *Florence Kelley*, 150-151; Sklar, F*lorence Kelley & Nation’s Work*, 293-294; Residents of Hull-House, *Hull-House Maps and Papers: Presentation of Nationalities and Wages in a Congested District of Chicago, Togeter with Comments and Essay on Problems Growing Out of the Social Conditions* (Boston: Thomas Y. Crowell & CO, 1895), vii-viii; Font-Casaseca, “Hull House Maps and Papers, 1895”, 525-526, 529-538. 緒方「大卒女性の第一世代」、25 頁。

[53] Davis, *American Heroine*, 100-101; Font-Casaseca, “Hull House Maps and Papers, 1895”, 525-526.

[54] 木原『ジェーン・アダムズ』、91－92 頁。

[55] メナンド『メタフィジカル・クラブ』、308 頁。

衣着せぬ物言いと相まって、時にハル・ハウスに緊張をもたらした。また彼女は、政治的にも社会主義的信念を持ち続け、そのことでアダムズやほかのレジデントとの関係が緊張することもあった。しかし、「ソーシャル・セツルメントの主観的必要性」でも語られたように、新しい意見や考え方へのアダムズの開かれた姿勢は、全員が活発に意見を交換し、議論できる雰囲気をハル・ハウスにもたらしていた[56]。アダムズは、自分にはないケリーの気質や思考、活動方法に刺激を受け、惹きつけられた。またケリーも、自分に欠けているアダムズの寛容な落ち着きを賞賛し、生涯にわたり敬愛した。同様にケリーと強い友情で結ばれていたラスロップは、アダムズとケリーは出会ってすぐに「互いの力を理解し」、「素晴らしく効果的な方法」でともに活動を展開したと述べている。強い友情で結ばれたアダムズとケリーは、互いのプロジェクトや論文執筆において助け合っていた。コストの面から『地図と報告書』の出版が暗礁に乗り上げかけた時も、アダムズが仲介に立ち、なんとか出版にこぎつけた[57]。

ケリーはまた、ハル・ハウスをより深く労働運動に関わらせることになる。『地図と報告書』に結実したケリーの活動は、近隣地区の貧困、過密、過酷な労働環境を明らかにし、これに衝撃を受けたレジデントやヴォランティアによって、ハル・ハウスは貧しい地区住民に救済の手を差し伸べるだけではなく、彼らを取り巻く現状に変化をもたらすための闘いを始める。アダムズはケリーについて、「自分たちを取り巻く産業の状況に私たち全員がもっと知的関心を持つよう刺激してくれた」と振り返っている。ケリーに刺激されたアダムズ自身も、スウェットショップ制度に反対する法律の重要性に社会の目を向けさせるべく、たびたび集会でスウェットショップの危険性を説くなど、労働運動において自分の影響力を行使するようになった[58]。

『地図と報告書』は、データや地図が貧しい人びとの問題に政治家の目を向けさせる政治的なツールになることを、セツルメント活動家に認識させた。その後数年間、労働条件の改善や市政改革を促す取り組みの一環として、ハル・ハウスのレジデントによって一連の調査と報告が続けられた。

むすびにかえて

ハル・ハウスのレジデントや協力者は、上層中流階級出身の「大卒第一世代」の女性や進歩的な男性知識人から労働者階級出身者まで多岐にわたるが、その結節点にいたのはジェーン・アダムズであった。自身も前者のグループに属すアダムズが、なぜ結節点になり得たのか。

---

[56] セツルメントに重要なことは、環境の変化に応じることができる柔軟性、迅速な適応力、方法変更を許容できる心構えの保持であり、いかなる信念に対してもオープンで、寛容であらねばならないと述べられている（Addams, “The Subjective Necessity for Social Settlements,” in Addams, *Twenty Years ah Hull House*, 64.）。

[57] *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 527-528; Knight, *Citizen*, 236-237.

[58] *The Oxford Handbook of Jane Addams*, 528.

ハル・ハウス開設当初、トインビー・ホールの哲学に刺激を受けたアダムズは物質的貧困以上に文化的貧困を問題視し、第一に文学や芸術を鑑賞する機会や教育を提供する場としてハル・ハウスを構想していた。1891 年にやってきたフローレンス・ケリーはこうしたハル・ハウスに、「アメリカの貧しい人びとが必要としているものは芸術ではなく食べ物だ」という現実的な確信を持ち込み、それが活動の基調を、より社会的で科学的なものに変えるきっかけのひとつとなったことは間違いないだろう[59]。また、そうした基調の変化は、20 世紀転換期アメリカにおいて急速に増加しつつあった大卒の若者にとって、より魅力的に映ったことも確かだと思われる。合理性や効率性が重んじられ、科学が重視されるようになった当時のアメリカ社会にあって、大学もまた従来の神学や哲学を中心としたリベラルアーツから社会学や経済学、行政学、医学といった専門を学ぶ場に変わりつつあった。しかし、大学で学んだ知識を生かす場が若者、特に大卒女性にとっては非常に少なかった。

そうしたなかにあって、20 代の頃のアダムズ同様、自分は社会にとって何の役にも立たない存在と考え、苦しむ者も多かった。折しも 20 世紀転換期は、さまざまな社会改革運動が展開された革新主義の時代である。リチャード・ホーフスタッター（Richard Hofstadter）の説明によると、この時代にヤンキー的責任感が一種の罪悪感に変質し、「中産階級の市民は、全ての社会悪に対して個人的責任をとる、という考え方をまともに受け入れていた。なにかすることが彼の義務であった」。その結果、この時代の改革者の間で責任のエトスは、「レース・ライフ」――現実の重圧に押しひしがれ痛めつけられている人びとにより近く接近すること――に参加する形であらわれた。そして、そうした考えは典型的にアダムズの「ソーシャル・セツルメントの主観的必要性」にみられる、と。続けて、その責任感の持ち主が「必要としたのは、何か行動がおこされつつあるという感じ、社会の道徳的水準が高められ、自分もそれに一役演じているという感覚であった。こうして腐敗は、革新主義者の精神的エネルギーの吐け口になった」、とホーフスタッターは述べる[60]。彼の見解に立てば、セツルメント運動は、ケリーのような筋金入りの社会主義者は別として、大半の大卒の若者にとって一種の罪悪感のはけ口であり、かつ自分を社会にとって有益な存在であると感じさせてくれるものであった。だからこそ、そこへの参加を決めたのであろう。しかし、サミュエル・バーネットが言うような「自らの魂の救済」のために始めたとしても、運動を通じて貧しい人びとと接触し、彼らの生活を直接見聞し経験したことで、祖母や母親の世代が行ってきた従来型の慈善ではなく、科学的調査に基づいた社会改革運動としての支援の重要性を認識したのであった。

他方、メアリ・ケニーやアルジーナ・スティーヴンズのような労働者階級の人びとにとって、従

---

[59] Higomoto, “Jane Addams and Hull House,” 150.

[60] R. ホーフスタッター（清水知久ほか訳）『改革の時代 農民神話からニューディールへ』みすず書房、1988 年［1967 年］、184－188 頁（Richard Hofstadter, *The Age of Reform: From Bryan to F. D. R* [New York: Vintage Book, 1955], 208-212.）。

来の慈善活動のような一方向の――持てる者から持たざる者への――運動組織ではないハル・ハウスは、居心地よく感じられたのではないだろうか。彼らは、労働組合を通して労働者仲間と連帯しデモやストを打つ一方、ハル・ハウスの仲間とともに世帯収入や就学率を調査し、その結果を公表し、世論を喚起し、法の制定を目指した。ハル・ハウスは、階級を超えた社会的連帯を可能にしてくれる場所であった。ところで、ケリーの登場とともに、ハル・ハウスの性質が文学的芸術的なものから社会改革的なものに変化していったことは本稿で何度か言及したが、実際のところ、労働者にとって文学や芸術はどのような意味を持っていたのだろうか。本稿では言及できなかったが、この時代の労働運動でしばしば「パンとバラ」というフレーズが使われ、「バラ」には教育、レクリエーション、「文化」に触れる機会といった意味が込められていた[61]。それを考えると、ハル・ハウスで行われていた読書会や展覧会、音楽教室なども、「食べ物」に劣らぬほど重要だったのではないだろうか。「芸術よりも食べ物を」というよりも、「芸術も食べ物も」、である。

革新主義や労働運動が広く受け入れられつつあった20世紀転換期、時代とともに柔軟に変化することを厭わなかったからこそ、ジェーン・アダムズと彼女のハル・ハウスは上層中産階級と労働者階級の結節点たりえたのであった。次回は、1894年のプルマン・ストライキを中心に、ハル・ハウス形成期に重要な役割を果たしたジョン・デューイとアダムズおよびハル・ハウスの関係について考察する。今しばらくアダムズとハル・ハウスの意義に関する考察を続け、それを通して、共同体の再建に注目が集まっている21世紀現在、人びとが幸せに暮らすには何が必要なのかについて考えてみたいと思っている。

[61] 寺田由美「ブレッド・アンド・ローズ」槇原茂編『個人の語りがひらく歴史―ナラティヴ / エゴ・ドキュメント / シティズンシップ―』ミネルヴァ書房、2014年、108－110頁。